

「真実の強さが取材者の覚悟をつくる」

北 朝鮮による日本人拉致。

いまだ解決を見ないまま、
被害者の家族たちは苛立ちを募らせています。

この拉致報道のきっかけとなる横田めぐみさんの
拉致疑惑を突き止めたのは、
ひとりのジャーナリストの執念の取材でした。

ドキュメンタリーとは何か、取材者とは何か。

被害者の家族に寄り添いながら、
常に取材者として、拉致問題の解決に尽力してきた
朝日放送の石高健次氏に聞きました。



石高 健次

朝日放送報道局プロデューサー

プロフィール

1951年生まれ。朝日放送報道局プロデューサー。長年、調査報道のドキュメンタリー制作に従事。1997年に横田めぐみさんが北朝鮮に拉致された事件を綿密な取材で掘り起こして報道し、拉致問題が社会から注目するきっかけを作った。被害者家族会の設立にも尽力。2005年にはアスベストが引き起こす健康被害の実態を明らかにした。

拉致報道、そして調査報道とは

2002年9月17日。

この日、小泉純一郎首相（当時）と北朝鮮の金正日総書記の首脳会談が平壤で行われました。北朝鮮は、日本人拉致について初めて認め、地村保志さんや蓮池薫さん、曾我ひとみさんら5人の生存と同時に、横田めぐみさん※1ら8人については死亡したと伝えてきました。

その後、蓮池薫さんら5人は帰国、その家族とともに日本で生活を送っていますが、死亡とされた拉致被害者については確たる証拠もないまま、いまだ何も進展していません。

この首脳会談から遡ること5年の1997年2月。13歳の女子中学生が北朝鮮に拉致された疑いがあることが報じられ、それをきっかけに拉致問題は大手メディアでも取り上げられ、外交課題として、政府も動くことになりました。

その拉致疑惑を報じたのは、ひとりのジャーナリスト。以前から北朝鮮による拉致を報じてきたものの、各社の後追い取材もなく、いわば黙殺されていた。そんな中、休日を利用し自腹を切りながら地道な取材を続け、ついに女子中学生、横田めぐみさんの拉致疑惑を突き止めます。

調査報道とはなにか、また被害者、社会の弱者と向き合うドキュメンタリーとはなにか。

常に社会的弱者をテーマにした調査報道を続けてきた朝日放送のプロデューサー石高健次さんにお話を聞きました。

拉致報道について

——横田めぐみさんについては、ご両親である横田さんご夫妻も、石高さんの取材をきっかけにして、初めて拉致を知ることになりましたよね。

初めて横田さん夫妻に会って拉致のことを告げる時はものすごく迷いました。取材者というのは、普通は自分とは直接関係なく、放送するテーマを追うというだけでその場面を撮っているじゃないですか。ところが、この時はめぐみさんの消息を20年ぶりに家族に告げる当事者になってしまった。告げる人であって、取材する人。撮る人であって、撮られる人、という裏表になってしまったんです。

それで、どのように横田さん夫妻に伝えたらいいのか、散々迷って出した答えは、これはジャーナリズムという視点から言えばルール違反になるかもしれないけれど、取材のプロセス、つまり、どうやってめぐみさんが拉致されて平壤で生きているかもしれないという情報を自分が知るに至ったのか、そのプロセスを詳しく家族に告げるしかないと思ったわけです。

あの時点では僕が伝える情報が本当に事実かどうかはわかっていないんです。もしかしたら拉致なんていうのはほんでもないデタラメで、間違った情報を伝えているんじゃないかという不安もすごくあった。間違っていたら、家族に希望だけを抱かせて、心をもてあそぶことになる。だから、絶対的な事実かどうかはわからない、自分がこういうプロセスで得た情報だから間違いないと思うけど、あくまで一つの情報として聞いてほしい、と繰り返ししました。

ただね、初めて自宅に行って5時間くらい話して帰る時、横田さん夫妻の顔がものすごく明るくなっていった。早紀江

さんは目に涙して、「今まで有力な手がかりは何もなくて、どこを向いて娘のことを考えたらいいのか、どこを向いて探したらいいのかわからなかった。たしかに絶対的な事実かどうかわからないけれど、娘が北朝鮮にいるかもしれないと聞いて本当に希望が湧いてきました」とおっしゃってね。それは半分嬉しかったけれど、半分は辛かったです。希望を持たせちゃった、もし全然違っていたらどうしようかと。その後、実名で報道することになるんですが、それも横田さんの家族の中でもめたし、僕としてももし自分が報道することで、それが引き金になってめぐみさんが殺されたらどうしようかと。いろいろなことを考えました。

——報道から5年経って、日朝首脳会談が実現しましたが、そこで横田めぐみさんから8人の死亡が伝えられました。その時はどう受け止められましたか。

あの時、僕は拉致被害者の家族会と一緒にいました。家族たちは東京の外務省飯倉公館に呼ばれて、(当時の)福田官房長官から「8人は死んでいます」と言われた。その瞬間、家族会は「あー、だめだった、死んでいた」と泣き崩れた。僕にすれば、めぐみさんのことが表に出たのが1997年2月3日ですけど、その直後に死んでいるのではないか、もし報道したために死んだとしたら、どう責任をとった方がいいのかと、ずっと思っていました。

それから数日すると、別々の土地で亡くなったと通告されていた8人の死亡確認書にある病院のスタンプが全部同一だとわかった。さらに、遺骨が洪水で流されてなくなっているとか、むしろ死んだというのはデタラメで、生きていたかもしれないとなりましたが、飯倉公館^{※2}でのあの瞬間は、みんなが死んだと信じましたよ。

※1「横田めぐみ」

1977年、新潟県新潟市で、下校途中に自宅付近で忽然と姿を消す。当時13歳。その後の消息は全くつかめなかったが、1997年、石高健次氏の地道な取材により、北朝鮮による拉致の疑いがあることが報道され、北朝鮮による日本人拉致被害者の象徴的存在となった。2002年の小泉訪朝では精神を病んで入院先の病院で自殺したと伝えられたが、その後北朝鮮から提供された遺骨はDNA鑑定で別人と鑑定されている。

※2「飯倉公館」
首相・外相会談や各種会議、レセプションで利用する外務省の施設。東京、麻布台にあり、隣には同省の外交史料館がある。

それで、飯倉公館から衆議院議員会館に帰ってきた家族たちに、支援者ら周りから、あまりにも辛いから会見は止めよう、引っ張り出すのは酷だという声が上がったんです。そうしたら、横田滋さんだっと思ったんですが、家族会の方から「会見をやりましょう、こういうことを聞いたと伝えましょう」と言った。

僕はその時に思いました。いつ死んだんだろうとか、どう責任をとろうとかなんて考えている場合ではない、家族たちは固い決意で実名、写真を出し取材をさせてくれるんだと。これはもうとことん一緒にやろうという力が湧いてきたのを覚えています。

真実に近づく取材とテレビ報道の影響

——拉致被害者だけでなく、社会的な弱者と言われる人々たちをテレビで報道するのは、すべてをさらけ出させることになりません。その影響力はどう考えていますか。

活字というのははるばる匿名性が保てるし、守れるでしょう。でも、テレビは違う。実名、顔出しでやればやるほど信憑性も高いけれども、はね返りも強い。その分、こちら側の覚悟が問われますね。「はい、すみませんでした」ではすまない。

たとえば「毒にも薬にもならない」という言葉があるけど、重病に効く薬というのは副作用があるわけですよ。僕らの番組は、強い薬の場合もある。で、副作用が出たら知らないではすまされません。でも正作用の方がより多く出て、世の中がちよつとでもいい方向に向けばいい、そう思って取材を進めている。当然、僕たちも取材対象者も一緒に覚悟しなければならぬ。その覚悟を強固にしてくれるものは、「発掘した事実の強さ」だと思っています。

——その「強い事実」を発掘するために、取材者として何が重要だと思いますか。

事実を知るためには様々な人物の懐に入らなければならぬ。懐に入るといことは、相手もこっちを見るわけですよ。つまり「こいつは何者だ。石高健次というのはいいか減な奴でないか。特ダネをとって目立ちたいだけではないか」と見てくる。一方で、こちらも「相手の言っていることは嘘じゃないか。お金が欲しいためではないか、売名行為ではないか」と、お互いに見合う。

時にはぶつかると。調査報道をしていて、内部告発者とか取材協力者の懐に入ったがために、相手の嘘なり、やっていることの矛盾なりを発見することがある。向こうは無意識でもね。「あなたの言っていることは違うじゃないか」と言ったら、相手は「あなたは私を信用してくれないのか。それなら、今まで撮った映像は全部ボツにして、取材は今日限りしてくれ」と言う。でもそこでひるまない。こちらでも言い返す。

全部ボツにされるのはかなわないから、こちらも何とか出口はないかと考え始める。さらに取材を深めて情報を取る。それを相手にぶつける。でも拒絶。また、取材してぶつける。それを繰り返していると、当初はお互いに気づかなかつたことを発見することがあるんです。ドカーンとテーマが深まる瞬間ですね。結果、より人間味のある、テーマも深いドキュメンタリーができる。

この「斬り結ぶ」というんですかね、それを通過してきた番組は、なんとも言葉ではいえない緊張感が漂い、それが視聴者を引き付けるんだと思います。

社会的弱者を背負う責任

——取材者は社会的弱者ではありません。当事者でないにも関わらず、当事者を社会にさらけ出すという、その責任はどこまで負えるのでしょうか。

一般に、取材者は事象の当事者ではない。いわば安全地帯にいるわけです。たとえば、僕の子どもは拉致被害者じゃない。どんなに横田さんたち当事者の近くにいっても、根本的にそこは違う。また、世の中には残念ながら様々な差別がある。取材者は抑圧されている当事者ではない。だから、「あなたたちは、いいねえ」としばしば皮肉混じりに言われる。それぐらいは無視します。

かつて、在日コリアンに対する民族差別の取材をしていて、言われたのが、「お前たち日本人に俺らの気持ち分かるか！帰れ」と。ある日、「俺の娘と結婚できるか」と言われた。その時は、僕も頭に来て、「あなたは、差別を無くそうと地域で素晴らしい活動をしていると聞いてここにやってきた。しかし、あなたは、どうせ日本人は朝鮮人を差別するもんだと諦めているではないですか。解決できると思っていない。僕はあなたの娘さんがどんな人かも知らないのに、娘さんに対して失礼な言い方だ」と言い返す。これでボツだなど引き上げた数日後、その人から、「あんた、俺の話聞いてくれるか？」と電話が入りました。

取材は、そこから始まるんです。相手もこちらを値踏みする。顔をテレビにさらけ出すことでさらなる差別を受けるかもしれないと怖れながらも自分を賭けるに足る記者かどうかと。

僕らは負の立場にある人をさらし者にする。でも、社会を良くしたいと取材協力してくれる。そういう人たちによつ

てできた番組はやつぱり重みがあるし、それを見た視聴者がこんな世の中はおかしいと思ってくれて、その積み重ねで社会は変わっていくと信じます。

だからこそ、僕はウロウロしながらも、前を向いて、一緒にやろうと言ってくれた人たちの気持ちと自分の生き様とを一緒に抱き合わせてやっていくしかない。結局は自分の生き方を問われる、そういう仕事なんだって思います。その背負った重さを支えるのは、埋もれている事実を発掘し、その事実を踏み台にして、世の中を何とかいい方向に持っていきたいという思いだけです。

——その生き様、生き方は一生問われ続けますか。

どんな取材でもこれで終わりと整理がつくものはないですよ。特に僕らはNHKのようにあちこち転勤があるわけじゃないから、「今度は九州に転勤です。しばらくはあなた方で頑張ってください。はい終わり」なんて心の幕引きはできない。やり続けるしかない。

それは報道でやり続けることもあるし、もしかすると、ジャーナリストの範囲を逸脱して、別の行動をすることがあるかもしれない。ただ何とかしなければという思いです。拉致でいえば、生きていれば取り返す、万一死んでいれば、なぜ死んだのかという事実と責任をはつきりさせる。と、これは片時も忘れたことはないですよ。

テレビ局のいれからごんごん

——民放の経営が苦しくなっている今、ゴールデンタイムは制作費の安いバラエティー番組が増えて、社会派の番組が少なくなっていますが、どう思われますか。

僕のフィールドの一つである『テレメンタリー』^{※3}は

※3 「テレメンタリー」
テレビ朝日系列の全国24局が参加して制作するドキュメンタリー番組。朝日放送エリアでは毎週土曜深夜1時30分から放送されている。

提供スポンサーをつけないでやっていて、放送の時間帯が遅い。けど、逆にすごいことができると思っっている。ゴールデンタイムで視聴率を稼がないといけないんだったら、逆にたいしたことできないかもしれない。そういう一面もあると思います。たしかにゴールデンは視聴率を稼がないと番組が潰れちゃうから、みんな苦労していますよ。僕は、小泉訪朝の翌年にゴールデンタイムで拉致の2時間番組をやったんですよ。あの時は拉致というテーマに対する時代の要請があつて、重い内容でも関心があるから、視聴率も稼げた。そういう時は、それに乗っかって出したらいいと思うし、逆に時間帯が悪い番組だったら、プロデューサーが勝負するという気持ちで、分厚いものをやったらいい。僕はテレビというのは、いろんな人間がいろんなことをやったりいいと思っっています。人間って喜怒哀楽があるじゃないですか。楽しいことも見たいし、世の中のおかしなことに正義感で怒る人もいるし、さまざまな視点から作る、バラエティーとか、スポーツとか、いろんなものがあつたらしい。ハードコアで、社会正義や社会性がないと値打ちがないなどとは思っていません。

——NHKに対してのメッセージをお願いします。

NHKはもつとタブーに挑戦してほしいと思う。NHKスペシャルのシリーズものなんかは、多分ものすごい情報力と機材と時間とお金をかけて、分厚くていいものを作っておられる。けど、結局、国家や団体など大きな権力を向こうに回してのタブー破りはやっていないように思う。埋もれている事実、それもタブーになっている事実を発掘してほしいと思います。タブーの裏には必ず差別とかの、理不尽に抑圧されている人がいますから。

優れた人材がいて日本にも世界にもネットワークがあるんだから、一丸火の玉になって、悪しき権力を暴いてほしいですね。期待しています。

インタビューを聞いて

相手の懐に飛び込み、こちらを信用してもらおう、その信頼関係からしか「真実」を描くことはできません。一方で、相手に近づきすぎることでも客観性を失うこともあります。人間同士の関係である以上、そこには正解はありません。常にもがきながら取材し続けるという凜としたジャーナリストの姿を石高さんから学びました。

報告 中央渉外部長 戸田 有紀